

# 25 journal

society&business Tokyo25 journal

執筆協力 編集室システムU okamura.nobuyoshi@gmail.com

## JA西東京グリーンセンター 創立30周年祝う 多種多品目の売場で人気



式典であいさつする福島生産者組合長



同センター発展に功績のあった清水高志さんらに感謝状が贈られた

JA西東京グリーンセンターの創立30周年式典が11月20日、青梅市野上町の霞共益会館で行われた。同センター生産者組合員と来賓合わせて約80人が節目を祝った。

### 出荷者一丸。プラム。ポックスなど克服

同センターは1985年12月、吉野農協園芸センターに特産物直売所がオープンしたのが始まり。農協合併を経て93年12月22日にグリーンセンターが開設された。2001年4月1日のJA西東京誕生とともに同JA特産部会として同センターの運営を担うようになった。14年7月、特産部会のほか、園芸部会、吉野梅部会、三田果樹振興会、きのこ部会、調布柿生産組合が合併し、同センター生産者組合が設立された。1億3000万円

現在に至ってこの間、09年に発生したプラムポックスウイルスの感染による梅樹の伐採、20年には新型コロナウイルスの流行などがあつたが、同JAと組合員のほか、出荷者が一丸となり困難を乗り越えた。式典で福島正文同センター生産者組合長は「グリーンセンターは一般野菜の他にウメ、ユズ、カキ、トマト、卵、梅干し、きのこ類など出荷品目が多く、年間販売量を見る限り、2008年が最も多量で、1億3000万円

同式典は30周年記念実行委員会(輪千恵太郎委員長)が準備し、開催したもので、30周年のあゆみを綴る記念誌「JA西東京グリーンセンター創立30周年」を刊行。出席者に配布された。席上、同センター発

の販売高を上げた。その後は生産者の減少や高齢化による生産量の減少傾向が見られるものの、新規就農者や新会員の入会もあり、今後出荷量の増加も考えられる。30周年を契機に当組合の販売量が増加し、ますます発展できることを願っている」と述べた。来賓で森田美実JA西東京専務理事は「プラムポックスウイルス感染の困難などを克服し、30周年を迎えられ敬意を表したい。生産者の皆さんには引き続き協力を賜り、センターを盛り上げていきたく」と期待を寄せた。副市長、島崎実青梅市議会議長らが祝辞を贈った。

### 記念誌「JA西東京グリーンセンター創立30周年 大地の恵みにありがとう」



色とりどりに次々に開花を迎えるシクラメン。50年栽培を続ける中垣久治さん。3000円ぐらいの鉢がよく売れるという

町内には7軒の栽培農園があり、様々な品種を育てている。中垣久治さん、浩光さんが営む中垣園芸もその1つ。花色は、歌では真綿色、薄紅色、薄紫と

「みずほ育ちのシクラメン」盛り大ヒットの「シクラメンのかほり」翌年から始まる 都内最大の産地に 都内最大の生産量を誇り、長岡地区の岩蔵街道沿いには、栽培のガラス温室が数多くあり、通称「シクラメン街道」と呼ばれる。この時期、クリスマスやお正月用に買い求める人が目立つ。シクラメンは瑞穂町役場が認定する「東京みずほブランド」にも選ばれ、「みずほ育ちのシクラメン」として親しまれている。50年経った今も名曲は色あせない。当初建てられたガラス温室も未だに利用され、栽培が続けられている。

### 赤、ピンク、白、紫やグラデーションの品種も

歌われた。今でもそれほど変わりなく、赤、ピンク、白が一般的。ただ、紫やグラデーションの品種も増えていて、都農業試験場が開発した香りのシクラメンも人気だ。シクラメンは瑞穂町が、同改善事業によりガラス温室を利用した花き栽培が盛んになった。シクラメンは比較的利益が出やすいので選ばれたとされるが、歌の影響も大きかったかも知れない。